

神が開かれる道

今朝はヨブ記から御言葉に聴きますが、旧約聖書のことはあまり知らなくてもヨブ記の名前を知っている人は多いのではないかと思います。古代オリエント屈指の文学作品として独立して評価されることもあり、事実、筑摩書房でしたか、世界文学全集にヨブ記が収録されていたはずです。なぜヨブ記はそれほど人々を惹きつけ、高く評価されるのでしょうか。

思うにそれは、わたしたちの人生に突如として降りかかる不幸や災難、そして引き起こされる苦しみ、人生の不条理に対する人間の側からの異議の申し立て。なぜわたしはこのような目に遭うのか。これほどまでに苦しまねばならないのか。この苦難の意味を教えてほしい。全能者よ、応えて欲しいという血を吐くような叫び。そうしたヨブの思いに、苦しみと無関係に生きることのできないわたしたちの心が共鳴するのであろうと思います。人類普遍の問題に真正面から取り組んでいるのがヨブ記です。

今日の聖書箇所は尹太悉先生の選ばれたものですが、先生はヨブ記の最後、結びにあたる章のヨブの悔い改めと感謝の賛美の箇所を選んでおられますので、何が彼の身に起きてここに至ったか、最低限のながれを辿りながら話を進めます。

ヨブは地方の有力者であり、財産も非常に多く、家族にも恵まれ、何よりも神を畏れる敬虔な人物として尊敬を集めていました。しかしサタンはヨブが敬虔なのは、神よ、あなたが彼を保護しておられるからだ、そうでなければヨブは神を呪うだろう。所詮は現世利益だと言ったのです。そこで神は、ヨブ自身を撃つことは禁じましたが彼の財産、家族を撃つことを許します。こうしてその日が訪れます。ヨブのもとに家来が次々と訪れて彼の財産である家畜が異邦人たちに襲われ、奪われたという。時を移さずまた家来が来て突如突風

が吹き寄せ、家が倒れて宴会を楽しんでいたヨブの子どもたちが皆亡くなったと告げるのです。まるで大津波がやってきて一瞬のうちにすべてをさらって行くように、ヨブは一日のうちにすべてを失ってしまいます。あまりの出来事に、神を呪って死んだらどうかと妻は言うのですが、これに答えたのが有名な、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこへ帰ろう。主は与え、主は取りたもう。主の御名ははむべきかな」という賛美でした。ヨブは敬虔な姿勢を崩しませんでした。

そこでサタンはもう一段、災いの脅威をあげて、ヨブ自身に重い皮膚病を送ります。そうすれば神を呪うだろうというのです。彼は頭のとっぺんから足の裏に至るまで出来物に覆われ、それを陶器のカケラで掻きむしったので皮膚は破れ、血は流れ、かさぶたと膿で酷い状況になったことが想像されます。全てを失い、残骸のようになったヨブの見舞いに駆けつけた三人の友人たち、エリファズ、ビルダド、ツォファルも、ヨブに起きたあまりの事態に一週間は声がかかれなかったといいます。やがて、ヨブは口を開きます。そして、神ではなく、自分の生まれた日を呪い始めます。こんな目に遭うくらいなら生まれて来なければよかったということでしょう。ここに及んでヨブを苦しめ始めるのが三人の友人達です。彼らは神の正しさを守ろうとして、ヨブよ、お前には隠れた罪があるにちがいないというのです。ここまで酷い目に連続して遭うからには何かあるだろう、因果応報というわけです。わたしたちも何かと理屈をつけて納得したいところがあります。因果応報であれば、この世界は秩序を保って動いていると思えますので安心していただけるのです。しかし、この因果応報の考え方こそが問題なわけです。正義の神がいるならなぜこのようなことが起きるのかという問いを引き起こすからです。この点について、ヨブ記は42章にわたって当事者となったヨブの苦悩と、それを通して得た信仰の到達点を明らかにします。それが

「あなたは全能であり、御旨の成就を妨げることは出来ないと悟りました。『これは何者か。知識もないのに 神の経綸を隠そうとするとは』その通りです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました」というヨブの言葉に表されています。ヨブ記は旧約聖書では知恵文学と呼ばれるジャンルに属します。箴言・コヘレトの言葉など知恵文学というのは人間生活が円滑に回ってゆくための格言を思い浮かべてもらえればよく、急がば回れとか、覆水盆に返らずとか、人間の生活、および人生全般について具体的な問題を処理するために必要な指示、配慮を与えるものです。しかし、人生は因果応報では回っていない。何故こんなことが、と思うようなことが起きる。そうした時に知恵では太刀打ちできず、知恵の破れと言われるような状況がおきる。知恵では対処できない人生の不条理に取り組んだのがヨブ記です。それはヨブの魂の格闘を記し、人間の尊厳はどのようにして保たれるかを示します。

さて抜け殻というか残骸のような有り様のヨブは、告発者に代わってしまった三人の友人たちと応戦しながらみずからの受けた仕打ちの意味をもとめて懸命にもがきます。わたしは思うのですが、わたしたちが、自分の尊厳を守りながら生きるにはさまざまなものがが必要です。たとえば仕事であったり、そうして手に入れた地位であったり、人々からの賞賛、快適な住まい、そして配偶者や家族であったり、友人や、持ち物がステータスを特徴づけることもあるでしょう。そうした自分を自分たらしめ、保たせるところのわたしたちの自負、自尊心、プライドのようなものを、わたしたちは生涯をかけて懸命に獲得しようとする。そしてそれを少しずつ失ってゆく。正確には、お返ししてゆく。裸で母の胎を出て、裸でそこに帰るというヨブの認識は正しい。しかしヨブはそれらすべてを一瞬にして失いました。これまで彼を祝福していた世界が一気に彼の周りだけ、安全と平和

を失い、秩序は崩れ去り、カオスに逆戻りしてしまった。こういう場合、人がその身を保てなくなる瞬間が死ぬまでのあいだに訪れるものですが、ヨブの肉体は崩れても何かがヨブを支えている。親友と思っていた者たちに次々と責められますが、彼はある一つのことを譲ろうとはしなかった。それがヨブを守ったのです。

説教の時間が限られていますので、核心だけに絞りますが、この男の凄まじさはこの世界には必ず正義の神がおられるという考えを捨てなかったことです。いないはずがない。そうでなければ倫理も正しさもすべての良いものは崩れ去ってしまう。そんなことはあり得ない。絶対にない。週報にも引用しておきましたが、わたしを贖う方は生きておられる。ついには塵の上に立たれる。この皮膚が損なわれようとも この身をもって わたしは神を仰ぎ見るであろう。このわたしが仰ぎ見る。ほかならぬこの目で見ると。わたしはその方を待ち望んで焦がれる。はらわたは絶えいる、とヨブは言い放ちます。わたしはここに全世界を裁くお方は正義を行うべきではありませんかとソドムとゴモラのために10人の正しい人がいるのでは、と命がけで執りなしたアブラハムの姿を重ねます。正義の神の存在とその働き、それを神の経緯とヨブ記では呼ぶのですが、これなくしては世界は闇となる。問題は、いまのこの自分に降り掛かっている苦しみが、神の正義なのだろうか、自分は不当に扱われているのではないか、原因と結果が調和していることを願っているのに、神よ、このわたしへの仕打ちは正しいのですか、という思い。神の正義は、わたしへの仕打ちに釣り合っているのか。神などいやしないと嘯くことはヨブには論外でした。友人たちのように自分の身に起きたことから、予定調和の因果応報に神と自分をあてはめることも真面目な態度ではないと理解している。残骸のようになったヨブはついには自分を神のようにして全能者を裁こうとすらす。ヨブは財産を失い、家族を失い、自身の健康を失いました。そ

れも転落という言葉がふさわしい状態でした。理解者も失いました。彼は神に撃たれた者と判断され、周りからは秩序も平安もなくなり、その結果、ヨブの人生は一貫性を保てなくなり、彼は内向きになり、意固地になりました。抜け殻のようなヨブが失わなかったのは、わたしを贖う者は生きておられるという、それだけが残っている。この世界の何処かに必ずわたしを捉えてくださる弁護者がおられる。この正しい方への確信はヨブから失われなかった。彼は苦悩のあまり、みずから受けた仕打ちを不当として、この世界の支配者である神に対して、訴状を額に結びつけて対決するとまで口にする。ここには自分の悲劇を極大化し、超越的な存在に対して、被造物にすぎない人間が、まるで神であるかのように振る舞う姿が見られます。彼の苦しみを測るのは彼自身であり、彼は自分の納得する結果でなければ受け入れようとは思わないのです。身につまされます。

虚空に向かって叫んでいるようなヨブでしたが、突如、神がヨブに応えられます。物凄いことが書かれていますからあとで 38 章以下を読んで頂くとよいのですが、それは何故ヨブが苦しんでいるのかの理由の説明ではありませんでした。神の創造の驚くべき御業をつぎつぎと上げてゆき、お前はそれを知っているか、応えてみせよ、というのです。神は創造の神秘を語ります。宇宙にまでヨブの目を向けさせ、オリオン座やすばるの配置について神のデザインを語ります。また野生の動物たちに神がしておられる配慮を示し、わたしが創造した世界と人間に対する配慮と保護の計画、つまり神の経綸をお前は知っているか、理解しうるのかと迫る。苦難と死という、人間にとって最高にリアルな出来事が身に及んだ時、お前はこの地球に満ちる塵のひとつに過ぎないではないかと突きつけられる。これは何者か、知識もないのに、神の経綸を隠そうとする者は、とヨブは言い渡される。二の句が告げないとはこのことです。今朝わたしたちに与えられた 42 章

1～6節は、わたしは理解しました。あなたを知りました、というヨブの応答です。何を理解したか、自分が、自分の苦しみに囚われて神の働きを暗くするものだということがわかった。全能者であり、超越者である神の創造の業、その働き、神の経綸を知り尽くすことは出来ない。みずからの苦しみを通して神に問い、そしてみずからのこうむった不条理が、神の経綸、世界の支配、そこには天体の運行や、動物の保護や、ベヘモスやリヴァイアサンといった伝説級の怪物なども含めて、神のご支配の下に置かれていることを認めた。自分は何も知らなかった。井戸のなかの蛙状態だったが、ついに神を見た。聴いていたことではなく、みずからの苦しみを通して砕かれ、この認識にまで辿り着いたと見てよいでしょう。ヨブの視点の変化が起きていることがとても大切です。しばしば苦しみは人間を固まらせてしまいますが、ヨブは、神の想像を絶するような御業に立ち合わせられることによって、みずからの無知を悟った。自分のはかりで神を測ることを断念して、悔い改めた。ここでヨブは自分がなぜこのように苦しんでいるのかの回答を得ていないことは重要です。それは必要なかった。苦しむ自分ごと、まるごと神の経綸のなかに、神の恵みのご支配のなかに置かれていることがわかったとき、ヨブの世界は再び秩序を取り戻したのです。わたしの理性などでは計り尽くせぬお方を知って、自分が塵芥に過ぎない存在であることを理解した。不条理は、神の摂理、神の経綸のなかに置かれて初めて意味をもつ。絶望ではなく、希望があることへつながれる。そう言って良い。知恵の破れを取り扱ったヨブ記は新約聖書のすぐ隣に立っています。なぜなら塵芥に過ぎない、永遠に比せば一瞬にして飛び去る人間の救済のために、神御自身が永遠を捨てて人間の肉体をまとい、苦しみと死を御自身に引き受けられるというキリストの出来事

によって、わたしたちの苦難に寄り添われたからです。こんな不条理なことはない。神はなぜ人となり給いし。クール・デウス・ホモと呼ばれる神の神秘の出来事を、わたしたちは神の愛と括ってしまいますが、その愛を知るのは、わたしたち自身の苦しみであり、悩みであり、不条理であるということを聖書は教えています。ヨブを支え続けた「わたしを贖う方は生きておられる。遂には塵の上に立たれる。」わたしはその御方をみたい、知りたい、その方に出会いたいという思いは、神の独り子、ナザレのイエスにおいて実現をする。苦しみを掘り下げてゆくと、その底に、わたしを支えるキリストの十字架が備えられている。わたしの贖い主が塵の上に立っておられる。この地上に満ちる塵芥のひとつのために、神はそのようにして命の道をわたしたちが開いてくださった。神が、罪ある人間、塵芥にすぎないわたしたちの代表者であるヨブのために、どれほど偉大な業を成し遂げられたか。神が開かれる道は、御自身の独り子の命を閉ざすことによってであったことを、今朝、わたしたちは畏れをもって心に刻みたいと願います。

お祈りいたします。